

原爆文学研究会報

第一一〇号

原爆文学研究会 二〇〇四年八月

占領の島、核の島 八月一日から一五日の間、職場の学生、愛知の某私立大学の学生、沖縄の学生、その他教師含め総勢三〇人あまりで、沖縄スタディーツアーを行なっている。フィールドは本島南端の糸満から北部の名護まで。知花昌一さんはじめ有名人にも会い、南部戦跡や首里城といった定番巡りもしたが、それ以上に時間と体力の許す限りフツの道行く「オジー」や「オバー」をつかまえては「ゆんたく」し、感じ、考えるといった旅である。いまこの小文をキャンパハンセンの城下町、金武の海を眺める宿泊所で書いている（一四日夕方）。昨日、普天間基地の移設予定地名護市辺古野地区で反対運動の座り込みをしている人たちに聞き取りをした。奇しくもその最中、普天間の米軍ヘリが隣接する沖縄国際大学に突っ込んだとのニュースがラジオから流れた。沖縄大周辺は先週末で私たちがベースキャンパにしていた場所である。もし、あのとき、あの大学駐車場に居合わせていたら、いま外で陽気に歌っている学生の幾人はあつというまに命を奪われただろう。私もこうしてこの小文を書くことはなかったかもしれない。夕食後のビールを飲みながら、どうしようもなくたまらない気分になる。急ぎ宜野湾に戻った沖国大の学生が伝えるには、ジュースを飲み笑いながら集まっていた米兵もいたらしい。暴力の現場を携帯で写そうとしたその学生は、ノ一 天氣に笑っていた米兵に阻まれたそうだ。いま現場は米軍が占拠

している。日本の警察や消防は現場の外側で立ち尽くしている。やはりここははまだ占領が続く島なのだ。そしてここは、朝鮮、ベトナム戦争の時代から変わることない核の島でもある。

(川口 隆行)

第一一回 原爆文学研究会報告

二〇〇四年七月三日(土)九州大学六本松キャンパスで開催した

「第一一回 原爆文学研究会」には、福岡県内外から約三〇名が集まりました。

坂口氏の研究発表では、「空襲を受ける側の人間が、B 29を美しいと感じることをどのようにとらえればよいのか」「資料によって日付の違いがあるのは、日本時間で記述するか米国時間で記述するかの違いによるのではないか」等の質問について意見が交わされました。



中野氏は研究発表では、「もっと詳細に核戦略の展開と核シエルトとの関係を見て、核の技術革新との関わりもとらえる必要があるのではないか」等の質問について意見が交わされました。

B 29の記憶

戦争は美しいか

坂口 博

発端は「体当り勇士の碑」であった。一九三二年二月、上海事変における肉弾三勇士は知っていたが、大膳堀近くにある、この記念碑のいわれは初耳だった。大膳堀は、筑豊の石炭輸送を担った堀川、遠賀川から洞海湾へ抜ける運河の遺構である。一九四四年八月二〇日夕刻、八幡空襲の米軍爆撃機B 29（超空の要塞）への体当り攻撃を敢行し、一機で二機を撃墜したという野辺重夫大軍曹と高木伝蔵兵長は、「嗚呼忠烈体当り勇士」と三好康之陸軍少将の揮毫で記されていた。ふたりとも、二十歳代の若者だった。

この時の空襲は白昼であったため、B 29撃墜を目撃した市民は多く、近年も新聞投稿にこの話題を見た覚えがある。しかし、周知の事実とはなっていない。日本国内で、B 29が初めて墜落したのも、この年の六月一六日夜、北九州若松なのに、地元でも知られていない。何故なのか。そうした疑問を抱きながら、本土空襲とB 29墜落の記録を調べ始めた。そして、それは私にとってのB 29の記憶を再確認する作業ともなった。

かといって、一九五三年生まれの私に、直接の戦争の体験や記憶があるのではない。幼い頃に、夏になると、母から繰り返し聞かされたB 29話である。「B 29が来た！」と言いながら、母は蚊を追いか

い、退治していた。私にとっては、「ぶぶん」と飛んでくる物体こそがB 29であった。空襲の被害を受けなかった母は、高空を飛んでいく編隊を、その音とともに、「銀色の機体は美しかった」という話で、私に伝えてくれた。

長じて、人並みにヴェトナム反戦運動などに加担していた私は、母のそうしたB 29話へ、いつしかこだわりを抱いていた。「美しい」という形容詞はないだろう、空襲でたくさんの民衆を殺した、憎むべき存在ではないか、と。

今回の報告発表は、当初の予定からするならば、その十分の一辺りで終わっている。撃墜されたB 29搭乗員の行方や実態もわからない。本土空襲による被害者数（軍人と民衆を合わせて）も、正確な数字は出ない。満洲・朝鮮・台湾の空襲や、日本軍が行なった中国重慶等への爆撃も具体的に知りたい。原爆に代表される、攻撃側の被害ゼロという、戦略爆撃の非対称性の確認。その恐るべき合理性と効率性の追求。

それらにもまして、私が辿りついたかったのは、B 29を邀撃しつつ、体当り攻撃をしていった若者たちの心象である。それは、後の特攻隊員にも通じるし、現在、イスラム圏の反米・反イスラエル・反帝国主義運動家が、果敢に自爆攻撃をしていく心情にも通じる。

おそらく、同じ状況下に置かれるならば、私は間違いなく彼らの側に居た。いま、「国家」や「民族」「宗教」の枠を超えて、何に依拠しながら、状況判断を下せばいいのか。果たして、それらに勝るものが、確実に共有化されているとは、とても思えない。具体的な「出来事」の検証と再生は、再び心情的な煽動に流されないための、一つの抵抗の手段である。

核シエルターという文学空間

中野 和典

極限状況における人間の姿を描くことを通じて何かを可視化させるという物語の方法がある。飢えや寒さなど、生命を脅かすほどの状況に人間を置き、いかに普段とは異なる行動をとるかを描き出す物語。そのような状況における非日常的な姿が、日常的な生活を送っていたときから潜在していた「人間の本性」を露見させるという物語。極限状況における人間の姿が、「人間の本性」と言えるような中核的なものであるのかということは問わないにしても、そのような物語が人間のある重要な側面を可視化させる機能を持っていることは確かだろう。

戦後、冷戦の激化にともなって核兵器が質・量ともに増強される中、核シエルターを舞台とする物語が多く書かれるようになった。核攻撃に対抗する防衛手段としての核シエルター。それは人間が核戦争の世界の終りというべき究極的な破壊に向かい合い、格闘する場である。そして核戦争による破壊が、人為的かつ組織的に生み出される究極的なものであることによって、それに対抗する核シエルターは、他のいかなる極限状況とも異なった性質を持つ場になっている。核シエルターの表象を通じて、どのような人間の在りようを前景化することができるのだろうか。

発表では、まず、核シエルターをめぐる社会的な背景に注目し、核シエルターという場が成立する前提について考察した。続いて、核シエルターの物語に重ねられる方舟のイメージに注目し、核シエルターという文学空間の機能について考えた結果を報告した。

「朝日新聞（東京版）」を中心に核シエルターに関する記述の変遷を見ると、核シエルターは核戦争の危機感の高まりとともに人々の関心を集め（一九八五年前後がその絶頂となる）、冷戦以後は「時代遅れ」のものとしてかえりみられなくなっていったことがわかる。しかし、核シエルターを作る人間の在りように、核兵器を作るのに劣らぬほどの深刻な問題を見いだすことができるのではないだろうか。

そのような問いを念頭に置いて核シエルターを題材とする物語のひとつの型ともいえる、方舟神話の引用の機能について考えた。方舟の比喻を用いて、核シエルター描き出した物語は多い。モルデカイ・ロシユワルト『レベル・セブン』、大江健三郎『洪水はわが魂に及び』、安部公房『方舟さくら丸』といった小説に描かれる核シエルターは、方舟神話の構造やイメージを組み換えながら、核によって世界秩序を保とうとする人間の姿を受け入れがたいものとして物語の場になっている。核シエルターという文学空間は、核弾道のネットワークを張り巡らせ、身動きが取れなくなった人間の、赦しも意味づけも得難くなった閉塞感を可視化させ、問題化する機能を持っているのである。

彙報

第一一回 原爆文学研究会

日時 二〇〇四年七月三日(土) 一四時より

会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号教室

内容 研究発表

B 29の記憶 戦争は美しいか

核シェルターという文学空間

坂口博

中野和典

今後の原爆文学研究会について

二〇〇四年六月二日未明、本会の世話人であった花田俊典氏が急逝されました。本研究会は発足から二年半、氏の呼びかけによってこの場に集った方々とともに活動してきました。刺激的な発言によって常に研究会を活気づけておられた氏のお姿があまりに鮮明で、逝去なさったことが未だに信じられないようにも思われます。

花田俊典氏という大きな支えを失ったこの研究会を今後どうするか、という不安の声も寄せられました。第一一回研究会における運営会議の結果、世話人を長野秀樹氏(長崎純心大学)にお引き受けいただき、事務局を石川巧研究室(九州大学)に変更して研究会は今まで通りの形で続行することが合意されました。

なお、ご報告が最後になり大変恐縮ですが、花田俊典氏の令夫人より原爆文学研究会に金一〇万円のご寄付を賜りました。いただきました寄付金は今度の研究会の活動に役立たせていただきます。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

編集後記

坂口氏の発表では、戦時中の新聞記事や、氏が作成した日本都市空襲年表などを参照しながら、空襲による都市炎上を語るさまざまな言説の中で用いられる「美しい」という表現に注目した。戦争において美を感じることは倫理感の欠如なのか? という問題提起について活発な議論が交わされたが、その中で、戦争という状況において、語る視点をどこに定めるか、という足場を設けた時点で私たちの倫理はまず問われているはずだ、という発言が印象的であった。美醜・善悪・正誤……等々二項対立の概念そのものが戦争という大状況に吸収され、今日の議論の場においては字面どおりに機能し得ないということを改めて確認した。

また中野氏の発表は、六〇年代から日本でも度々報道されるようになった核シェルターの存在について、その文学空間における意味づけを問うことを最終的な目標とするものであったが、議論がじゅうぶんに熟さないまま時間切れとなったのはたいへん惜しい。関連著書、映画、新聞、絵本、漫画など、発表のなかで提出された資料があまりにも多彩であったため、出席者それぞれが刺激を受けすぎて嬉しい消化不良を起こしてしまったことが原因のひとつとして考えられるかもしれない。発表第二弾への期待大である。(U)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811 6520 福岡市中央区六本松4 2 1

九州大学大学院比較社会文化研究院 石川巧研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>